

〔資 料〕

共通訳「主の祈り」に思う

藤 間 繁 義

共通訳2000年「主の祈り」使用

2000年5月8日、東京におけるカトリック教会と聖公会の合同礼拝において以下に記す共通訳主の祈りが用いられた。以後、日本のカトリック教会と日本聖公会の各教会では、この共通訳「主の祈り」が、公祷式文中の「主の祈り」として使用されるようになって、今日にいたっている。

さらに、日本福音ルーテル教会もこれを公祷式文中の「主の祈り」とすることが決定され、次の祈禱文改訂のときに印刷公布することが決まっている。

天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み国が来ますように。
み心が天に行われるとおり地にも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。
わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。
国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。
ア - メン

キーワード：「主の祈り」、Lard's Prayer

これが両教会における祈祷式文として用いられるようになった経緯は、数年におよぶ両教会がそれぞれ選出したエキュメニズム委員たちの合同委員会の、双方から選ばれた「主の祈り」ワーキンググループの努力の積み上げによるものであるが、日本聖公会にエキュメニズム委員会がつくられていらいその一員として奉仕して来たわたしにとっては、極めて感慨深く思われる。また、教会再一致の願いをこめてエキュメニカル運動に貢献した先人たちの活動を省みると、長い歩みのあったことを思わずにはおられない。

そもそも「主の祈り」と呼ばれるものは、イエスが弟子たちに請われて教えた祈りと伝えられ、すべてのキリスト教会において重要視されているもので、キリスト教信徒であれば熟知している筈であるが、キリスト教信仰に無関係な読者のため『キリスト教大事典』の記事を参考のため、巻末の〔注1〕として記すこととする。

「ギリシア語新約聖書」の「主の祈り」

一般には、イエスが日常話していた言葉はアラム語であっただろう、と言われておりながら、イエスや弟子たちの言行や使徒たちの手紙などが収録されている新約聖書は、ギリシア語が用いられて来たし、邦訳の新約聖書も「ギリシア語新約聖書」をテキストとしているので、以下に「ギリシア語新約聖書」の「主の祈り」を示して置く。

マタイ福音の「主の祈り」

Πάτερ ἡμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς・
 Ἁγιασθήτω τὸ ὄνομά σου・
 ἐλθάτω ἡ βασιλεία σου・
 γενηθήτω τὸ θέλημά σου,
 ὡς ἐν οὐρανῷ καὶ ἐπὶ γῆς・
 Τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν ἐπιούσιον δὸς ἡμῖν
 σήμερον・
 καὶ ἄφες ἡμῖν τὰ ὀφειλήματα ἡμῶν, ὡς καὶ
 ἡμεῖς ἀφήκαμεν τοῖς ὀφειλέταις ἡμῶν・
 καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς εἰς πειρασμόν, ἀλλὰ
 ῥύσαι ἡμᾶς ἀπὸ τοῦ πονηροῦ.

ルカ福音の「主の祈り」

Πάτερ, ἁγιασθήτω τὸ ὄνομά σου·
ἐλθάτω ἡ βασιλεία σου· ὁ τὸν ἄρτον ἡμῶν τὸν
ἐπιούσιον δίδου ἡμῖν τὸ καθ' ἡμέραν· καὶ ἄφες
ἡμῖν τὰς ἁμαρτίας ἡμῶν, καὶ γὰρ αὐτοὶ ἀφίομεν
παντὶ ὁφείλοντι ἡμῖν· καὶ μὴ εἰσενέγκῃς ἡμᾶς
εἰς πειρασμόν.

The 21st edition Eberhard Nestle's Novum Testamentum Graece を使用。

日本語訳の聖書

キリスト教が、初めてわが国に伝えられたのは言うまでもなくキリシタン時代であったが、宣教師たちが日本語訳聖書を手にしていた、と考えることは出来ない。それはキリスト教がわが国に伝えられた時から短い年月の間に、キリシタン禁制が施行されるまでの間に驚くほどの数の入信者を創出し、禁制下において夥しい数の殉教者を輩出したあの時代に、部分的に日本語に訳したものを用いていた、との言い伝えはあるとしても小冊子さえ現存しておらないので、あの短時日の間に膨大な聖書の邦訳が存在したとは考えられないのである。もともとヘブライ語で書かれた旧約聖書とギリシア語で書かれた新約聖書が、直接日本語に訳されるための言語習得者が存在していた痕跡も、宣教師たちが持ち込んだ母国語の聖書から、邦訳聖書を作成使用した痕跡も見当たらないのであり、まして抜粋訳が作られたことはあっても、聖書全体の日本語訳は無かったと考える所以である。

ところが、18世紀末から19世紀にかけて中国において聖書の中国訳が進められ、さらには、キリシタン禁制下にあった江戸時代末期から明治初期に、宣教師によって日本人のための聖書の日本語訳が企てられ、上海や沖縄で作られたものもあり、明治学院チャプレン金井 創氏は「キリスト教学校教育同盟」発行の月刊『キリスト教学校教育』461号において、以下の如く列記なさっている。

その当時の宣教師たちが主導して行った聖書の翻訳は、漢文の素養のある

日本人助手にまず漢訳聖書の書き下し文を作らせることであった。というほどに初期の日本語聖書にとって漢訳聖書は決定的な影響を及ぼしていた。

そうした翻訳のおもなものをあげてみると、

(江戸時代)

1823年、モリソン『神天聖書』(漢訳)

1837年、ギュッツラフ『約翰福音之傳』『約翰上中下書』

1850年、ウィリアムズ『馬太福音書』

1855年、ベッテルハイム『路加傳福音書』(琉球語訳)

1864年、カルバ - トソン『旧新約全書』(漢訳)

1867年、ヘボン『和英語林集成』

(明治時代)

1871年、ゴ - ブル『摩太福音書』(口語訳)

1872年、ヘボン、ブラウン『新約聖書』(馬可傳, 約翰傳, 馬太傳)

1873年、ヘボン、ブラウン『約翰傳』(口 - マ字・英文対訳)

1874年、聖書翻訳委員社中結成

1879年、N・ブラウン『志無也久世無志与(しんやくぜんしょ)』

1880年、翻訳委員社中『新約全書』

1887年、東京聖書翻訳委員会『旧新約聖書』(明治訳)

1917年、大正訳改訳・『新約全書』

1955年、日本聖書協会『口語訳聖書』

1987年、日本聖書協会『新共同訳聖書』

上記金井氏のリストに記された日本語訳聖書の中でも、ギュッツラフ『約翰福音之傳』『約翰上中下書』、ウィリアムズ『馬太福音書』、ベッテルハイム『路加傳福音書』、ゴ - ブル『摩太福音書』、稀観本であり復刻販売されたものながら本学総合研究所でも所蔵している。

金井氏リスト以外にも、プロテスタント教会の中には、日本聖書刊行会(新改訳)『新約聖書』(New Japanese Bible New Translation, 1963, 1965),

日本聖書協会・共同訳聖書実行委員会（共同訳聖書）『ルカによる福音書』1975、日本聖書協会『新約聖書』（共同訳）1978年も刊行されているが、この共同訳聖書は、後述するように、第二バチカン公会議以来カトリック教会とアングリカン・コミュニオンやプロテスタント諸教会との間のエキュメニカルな会合が重ねられるに伴って、実現されたものである。

文語訳聖書の「主の祈り」（プロテスタント側）

第二次世界大戦後の日本国内では、アメリカのキリスト教会の敗戦国日本の教会への思いやりと宣教意欲から、膨大な量の日本語聖書が贈られ、教会を通じて流布されたし、ギデオン教会から日英語対訳の新葉聖書が教会、学校を通して信徒や学生に配付されて、日本語聖書は急速にひろまり、誰でも容易に手にすることができるようになった。それは、流麗な日本語で書かれた（明治訳）『旧新約全書』（昭和改訂版）と言うべき、紐育、倫敦、東京、聖書協会連盟『旧新約聖書』（Japanese Bible R53W 150M-(1)-47-C.P.）であり、その新約聖書、マタイによる福音書には

「天にいます我らの父よ、願はくは御名（みな）の崇（あが）められん事を。

御国（みくに）の来たらんことを。

御意（みこころ）の天のごとく地にも行われん事を。

我らの日用の糧（かて）を今日もあたへ給へ。

我らに負債（おいめ）ある者を我らの免したる如く、我らの負債を免し給へ。

我らを嘗試（こころみ）に遇わせず、悪より救い出したまえ。」

6：9-13.

ルカによる福音書には

「父よ、願はくは御名（みな）の崇（あが）められん事を。

御国（みくに）の来たらん事を。

我らの日用の糧（かて）を日毎（ひごと）に与え給へ。

我らに負債（おいめ）あるすべての者を我ら免（ゆる）せば、我らの罪をも免し給へ。

我らを嘗試（こころみ）に遇わせ給うな。」11：2-4.

と記されており、当時の日本聖公会の祈祷書（1938年版）には、

天に在（まし）す我らの父よ。

願わくは御名（みな）を聖となさしめ給へ。御国をきたらしめ給え。

御心を天に於ける如く地にも行はし給へ。

我らの日用の糧を今日（こんにち）もあたえ給へ。

我らに罪を犯すものを我ら赦す如く、我らの罪をも赦し給え。

我らを嘗試（こころみ）に遇わせず、悪より救い出（いだ）し給え。

国も権（ちから）も栄（さかえ）も世々に父の有（もの）なればなり。

ア - メン

の「主の祈り」が用いられていたのである。

口語訳聖書の「主の祈り」

1950年を過ぎたころから、聖書の言葉が、信徒の中の若年層には馴染み難いものと感じられているとの理由から、改訳の企画が進められて、新約聖書は1954年、旧約聖書は1年遅れて1955年に完成使用されることになり、日本聖書協会から「聖書」として公刊されたのであり、日本基督教団でも日本聖公会でもいち早く礼拝をはじめ、公に用いることになったのであるが、文語訳聖書に親しんで来た年配の信徒たちの反応はいまいちで、評判は必ずしも良くはなかったが、その中の「主の祈り」は、以下のように訳されている。

マタイによる福音書には、

天にいますわれらの父よ、

御名があがめられますように。

御国がきますように。

みこころが天に行われるとおり，

地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの食物を，

きょうもお与えください。

わたしたちに負債のある者をゆるしたように，

わたしたちの負債をもおゆるしてください。

わたしたちを試みに会わせないで，

悪しき者からお救いください。

また，ルカによる福音書の方は，

父よ，御名があがめられますように。

御国がきますように。

わたしたちの日ごとの食物を，日々お与えください。

わたしたちに負債のある者を皆ゆるしますから，

わたしたちの罪をもおゆるしてください。

わたしたちを試みに会わせないでください。

と訳されていた。

また，1983年発行の新改訳『新約聖書』（New Japanese Bible New Translation 1963, 1967）における「主の祈り」はマタイ 6：9-13では，

天にいます私たちの父よ。

御名があがめられますように。

御国が来ますように。

みこころが天で行われるように地でも行われますように。

私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。

私たちの負いめをお赦しください。

私たちも，私たちに負いめのある人を赦しました。

私たちを試みに会わせないで，悪からお救いください。

〔国と力と栄とは，とこしえにあなたのものだからです。ア - メ

ン。]

と記されており、ルカ11：2-4では、

父よ、御名があがめられますように。

御国が来ますように。

私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。

私たちの罪をお赦してください。

私たちも私たちに負いめのあるものをみな赦します。

私たちを試みに会わせないでください。

と訳されている。

そして、1991年に公刊された日本聖公会の改訂祈祷書の「主の祈り」も、このような改訂訳の動きと関連して、以下のように改訂されたものである。

天にいますわたしたちの父よ、み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

み心が天に行われるとおり、地にも行われますように。

日ごとの食物を今日も与えてください。

わたしたちに対して罪のある者を赦していますから、

わたしたちの罪も赦してください。

わたしたちを試みに陥らせずに、悪から救い出してください。

み国も力も栄光も、世々に限りなく主のものだからです。

この「主の祈り」は、日本聖公会の礼拝や集会などで常用されたのであるが、「わたしたちに対して罪のある者を赦していますから、わたしたちの罪も赦してください。」という語句は、人間が自分の行為と交換するような態度で、神の赦しを強請しているかのごとく聞こえるから、あまり良くないと説教で指摘した司祭さえ存在した。

第2バチカン公会議後の両教会の歩み寄り

1959年、ローマ教皇ヨハネス23世が第2バチカン公会議招集の意思を表明して、教会再一致を呼びかけて以来、日本国内におけるエキュメニカル・ム

ーブメントは、カトリック教会の積極的な参加によって、教会間の交わりや共同プログラムなども頻繁に行われるようになったのである。

日本国内においては、人々の温和な性格によるものか、信仰の受け止め方が生ぬるいことによるものかは別として、カトリック教会信徒とプロテスタント教会信徒が、互いに殺し合うような激しい対立も争いもおこらなかった。しかしながら、歴史上有名な聖バルトロマイ日の大虐殺²を最たるものとしてそのようないがみ合いや争いは数多く存在しておおったし、わたしがはじめてエキュメニカル・ワークキャンプに参加した1953年当時のフィリピンでは、プロテスタント教会の集会にカトリック教会信徒が嫌がらせしたり、カトリック教徒のプロセッション目掛けてプロテスタント信徒が石を投げ込んだりするトラブルが存在しておった。1948年アムステルダムで第1回世界教会会議が開催された時、招待状を送られながら一人の代表者をも派遣しなかったカトリック教会を、カール・バルト³が「悪魔のようなもの」と強く批判をしたことも、喜ばしいことに今では遠い過去のこととなってしまう程、カトリック教会のエキュメニカル・ムーブメントへの積極的参加が、教会再一致の道を大きく前進させて来た。

ヨハネ2世の後を受け継いだパウロ6世も、前任者のエキュメニカル路線を継承し、特に世界平和のためにつくすことことは教皇の果たすべき最高の使命の一つであるとの認識から、1968年以来毎年1月1日には全世界に向かって平和のメッセージを発信し続けている。この平和のメッセージ発信は、ヨハネ・パウロ2世にも引き継がれているが、ヨハネ・パウロ2世は世界各地を訪問して平和を訴え、教会ならびに民族間の和解のために日夜力を尽くされている。

第1回世界教会会議に先立ち、同じ1948年夏にはカンタベリー大主教フィッシャー博士⁴の招集で、全世界の聖公会主教による第8回ランベス会議が開催され⁵、前年1947年9月27日合同発足した南インド教会を承認してアングリカン・コミュニオンの一員として迎え入れる決議をしたのである⁶。

このような再一致の動向は、プロテスタント教会のエキュメニカル・ムー

ブメント推進に影響を与え、世界教会会議は回を重ねどんどん進展したが、カトリック教会からの参加も歩み寄りも見られなかった。ところが、ローマ教皇ヨハネ23世によるバチカン公会議招集以来、全世界のカトリック教会がプロテスタント教会に歩みよりを見せ、地域社会においてもプロテスタント教会の主催するエキュメニカルな催しにも、極めて精力的に参加するようになった。1960年当時、わたしが勤務しておった神戸でも八代斌助日本聖公会神戸教区主教、有賀鉄太郎松蔭短期大学学長、神戸中山手カトリック教会モラ神父、神戸六甲カトリック教会ベレッティ神父をはじめ、多くのカトリック教会の修女さんや信徒の方々や聖公会およびプロテスタント教会の聖職や信徒の方々による、エキュメニカル・トークや合同祈祷会が頻繁に行われるようになった。

こうした集会では、主の祈りを共に唱えて終了するのが常であったが、各地における集会に参加した聖職も信徒も、カトリック教会、聖公会、日本基督教団等の主の祈りの文言の違いに早くから気づいていて、同じ文言の主の祈りが用いられるようになる日を待ち望んでいたものだった。

カトリック教会と聖公会は「一つとなる」ことを目指して、それぞれの教会組織のもとにエキュメニズム委員会を設置して、その推進のための研究を行って来たのであるが、福音ルーテル教会にもエキュメニズム委員会がもうけられ、世界レベルのカトリック教会と聖公会、カトリック教会とルーテル教会、聖公会とルーテル教会の合同委員会がくりかえされるようになったし、日本においてもカトリック教会と聖公会、カトリック教会とルーテル教会、聖公会とルーテル教会の、エキュメニズム委員たちが年間2回の合同の会議を重ねて来た。

こうした30有余年の間には、ローマとカンタベリーでエキュメニズム委員会が合意した文書が各国々に配付され、我々日本聖公会のエキュメニズム委員たちはカトリック教会のエキュメニズム委員諸師とともに、次々と公表されたそれらの合意文書を日本語に翻訳して、それぞれの教区教会への配付を行って来たのである。そのような合同委員会の時でも、それぞれの教会で日

常使用されている「主の祈り」を同時に唱えるのであるから、同じ内容の祈りでありながら多少文言が違っておったため、お互いに感ずる違和感は予想以上のものだったので同じ文言の「主の祈り」待望の声は、それぞれのエキュメニズム委員会からも、教区、教会からも起こって来ておった。

カトリック教会と聖公会の合同エキュメニズム委員会が、協同して口語訳「主の祈り」を訳出しようと図り、それぞれの司教会、主教会の了承を得て作業を開始した。

共同訳聖書について

日本中のキリスト者が礼拝や聖書研究や聖書輪読会のときに、同じ言葉に訳された聖書を使用できたら、どんなに嬉しいか、という希望に応えるものとして、カトリック教会とプロテスタント教会の協力によって、既に触れたように「共同訳のルカによる福音書」や共同訳の「新約聖書」が刊行されたのである。

日本聖書協会『新約聖書』（共同訳）1978年の表紙カバーには

『新約聖書』共同訳の特色

カトリック・プロテスタントの協力による、日本で最初の共同翻訳。

翻訳者は日本の新約学界の水準を示す。

最も新しく、権威ある校訂原典に基づく厳密な翻訳。

小見出しをつけ、読みやすい、用語・表現を用いた現代日本文。

はじめて読む人のための、用語解説など40ページ付録つき。

と、記されているけれども、この『新約聖書』共同訳の中の人名が、従来使用されていたものから変わったために、プロテスタント教会の牧会者や信徒の評判は必ずしも良くはなかったのである。

立教大学チャプレン竹田鐵三司祭は、以下のように皮肉った一文を残されている。

・・・そんなワケだから、この度全部男性、女性の名前を一夜にし

てヒックリ返した人物名、到底生きてるウチはものになるまい。

そんな人の気も知らず、新進の聖書学者たち、とんでもない事をしたモンだ。口語訳を読んで居ると、皆人物名が変わって、ヨソの家に行ったようである。「アアあの人の事か」とその度ごとに考えこむ。日本のクリスチャンは辛い。

ヤソ、イエス、イエズス、エスさま。英語のメリーさんも昨今はメアリーと改名。

マタイで親しんで来たのに、マテオスさんではてれくさくて。(竹田鐵三著、『はこぶね』昭和60年)

それ故、1987年に財団法人日本聖書協会によって刊行され、今日、カトリック教会も殆どのプロテスタント教会でも使用されている『聖書』(新共同訳)は、聖書の人物名を、プロテスタント教会の牧会者や信徒が明治以来親しんで来たイエス、マリア、という人物名を復歸させる改訂がなされたのである。

カトリック教会の「主の祈り」口語訳の歩み

エキュメニカルなキリスト教会の運動は、第二バチカン公会議以来カトリック教会のリーダーシップにより、目ざましい進展をとげたのである。その蔭には、航空機や交通手段の発達と電波通信の驚異的な発達、殊にテレックス、ファックス、コンピューターなどにより、地球上の時間や空間に煩わされることなく、会合を持ち、討議し、意見を交わすことができるようになったことは、エキュメニズムの進展にも大きな効用を発揮している。聖公会とローマ・カトリック教会、聖公会とルーテル教会、カトリック教会とルーテル教会の間の国際的なエキュメニズム委員会の研究討議の内容も記録も、瞬時にして世界各地に伝えられ、多くの国や地方において日本における合同委員会同様に、カンタベリーとバチカンで合意された文書の共同訳や解説書作りに協働することを、可能として来たのである。

そうして、「主の祈り」の共通訳を作成するための努力を、共同して積み

上げることになったのであるが、聖公会も日本のプロテスタント教会もカトリック教会も、それぞれの歴史の中で、それぞれ固有の日本語聖書や祈祷書、典礼書を使用してきたのであるから、それらの日本語聖書や祈祷書、典礼書を全く無視しての「主の祈り」共通訳を作成することは許されないことは当然で、極めて慎重に検討を続けた。

共通訳「主の祈り」作業経過

1997年10月8日に開催された第53回聖公会／ローマ・カトリック教会合同委員会においては、「主の祈り」についての議題についてカトリック側からの報告があった。

共通の「主の祈り」を作成したいという前回会合での提案に基づいて、ローマ・カトリック側では、司教総会に提案し、作業開始についての了承を得た。聖公会だけではなく他のプロテスタント諸派にも最初から呼びかけることや、『カトリック教会のカテキズム』との関連からもマタイ福音書に基づくべきであるなどの付帯意見は出されているが、正式な回答はまだ届いていない。

ローマ・カトリックの典礼委員会ではすでにミサ典礼書改訂に向けての研究が進んでおり、口語の「主の祈り」についても資料収集などの検討が始まっている。そこで今回は典礼委員会秘書の田代和生神父を招聘し、日本のカトリック教会で「主の祈り」について検討して来た経緯を聞いた。

イ．司教総会で作業の開始は了承されたが、でき上がったものを見て、正式に認められるかどうか判断されることになる。

ロ．今までの経緯を見ると、大きな流れとしては1979年までで頓挫している。1993年に『日々の祈り』が発行され、そこに口語の「主の祈り」があるが、ミサ典礼書の研究部会の中で口語化について検討し、もう一度練り直す。NCCのよびかけがもとなので、原点に戻ってということもある。典礼で使うということは、「歌える」ということと、大人も子どもも区別なく使えるということが必要になる。

ハ．忠実な逐語訳にするか、意味をとって大幅に言葉を変えてもよいのか、

どちらかが方針とならなければならない。

〔意見交換〕

イ．聖公会は独自のものを作成した。ＮＣＣ（日本キリスト教協議会）の信仰と職制委員会の中に継続性がない。

ロ．今回の計画をルーテルの方に話したところ、かなり要望はあった。ローマ・カトリックがＮＣＣに働きかけて、刺激を与えてもよいかもしれない。

ハ．ＮＣＣに持ち込んでみることも考えられる。その反応次第で、ルーテルと３教会でまとめてはどうか。

ニ．まとめるところで原案を作り、ＮＣＣに出すほうがよい。ＮＣＣでは人が集まって決定するだろう。

ホ．聖公会の主教会でも、ルーテルと３教会でできるものを作って、他に紹介するほうが具体的ではないかという意見がある。音頭はローマ・カトリックがとってくれるとよいとおもう。現行の祈祷書の訳文にこだわりはないので、よいものができれば合わせることができないのではない。原文の表現の正確性にこだわるとはない。

ヘ．聖公会／ルーテル／カトリックが合同で、問題となる箇所を議論して、参考資料として整理するとよい、ローマ・カトリックの典礼委員会では市瀬英昭神父（神言会）が担当して現在資料収集中である。他の委員で以前からかかわっているのは国井健宏神父（御受難修道会）がいる。

ト．実際には議論ではなく分かち合い程度で、テキストそのものの検討に入れればよい。

チ．実際の作業のためには３教会の合同委員会が必要である。担当窓口はエキュメニズム委員会とする。

ルーテルとの３教会合同の会合を行う。現在までの経緯をルーテルの徳善義和先生（ルーテル側のエキュメニズム委員長）に伝え、ＮＣＣ信仰と職制委員会へも適宜情報が伝わるように依頼する。

さらに、この第53聖公会／ローマ・カトリック合同委員会の席上で、典礼委員会資料の『「主の祈り」に関する経緯』が配付され、1972年以来の努力が披瀝された。

「主の祈り」共通訳検討ワ－キング・グループからの提案（1998年12月11日）

主の祈り 案

天におられるわたしたちの父よ、

み名が聖とされますように。

み国が来ますように。

みこころが天に行われるとおり地にも行われますように。

わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。

わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします。

わたしたちを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。

国と力と栄光は、永遠にあなたのもんです。アーメン。

〔意見交換〕

ロ－ローマ・カトリック典礼委員会／セ－聖公会祈禱書

1 天におられるわたしたちの父よ、

ロ－ 天におられるわたしたちの父よ、

聖－ 天にいますわたしたちの父よ、

1. 「おられる」「います」ともに尊敬語表現だが、尊敬の意味での「います」は文語調であり、現代口語では単に「いる」の敬称と受け取られる。また、聖公会では従来の文語文と同じことばのため、唱える際に紛らわしこもある。

2. 「わたしたちの」は、単なる所有代名詞なので日本語に必要無く、かえって信者のみという限定された意味の排他的ニュアンスがあるという批判もあるが、教会外の人々も含めた広い意味での解釈

する事は不自然ではない。

3．全体として新共同訳聖書と同じ表現である。

2 み名が聖とされますように。

口 - み名が聖とされますように。

聖 - み名が聖とされますように。

1．人間によって尊敬されるというより，神に従う人によって神自身が聖なる方であることが明らかにされるという意味がある。「聖とされる」は「崇められる」「尊ばれる」より明確な表現である。

3 み国が来ますように。

口 - み国が来ますように。

聖 - み国が来ますように。

「み国」は神が支配している状態を意味する。すでにわたしたちの間で行われている神の支配が続けられ，世の終わりの完成に向かうことへの期待である。

4 みこころが天に行われるとおり地にも行われますように。

口 - みこころが天に行われるとおり地にも行われますように。

聖 - み心が天に行われるとおり地にも行われますように。

「みこころ」は「神の意志」という意味であり，単なる心情的な意味ではないことを明確にするためひらがな表記とする。ローマ・カトリックでは従来「み旨」と表現してきたが，一般的な語ではなくなってきており，人間に祝福を与えるという善意を込めた意志という広い意味を考え，「みこころ」とする。

5 わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。

口 - わたしたちの日ごとの糧を今日お与えください。

聖 - 日ごとの食物を今日も与えてください。

1. 聖公会では「わたしたちの」が入っていないことに批判がある。
わたしたちの食物をいただくというニュアンスである。「わたしたちの（日ごとの糧）」が入っておれば、「わたしたちに（あたえてください）」は繰り返さなくてもよい。
2. 「糧」は日常頻繁に使うことばではないが、年少者でも一度意味がわかれば抵抗はないであろう。ここでは人間にとって生きるために必要なもの（こと）として、聖体のパンもみことばも含まれるので、「食物」では物質的なニュアンスが強く「パン」という表現も日本語では適当ではない。
3. 「今日も」という表現については、マタイ福音書では「今日」であり、イエスの本来の特徴を表していると考えられるが、ルカ福音書の「毎日」という表現も、人間の切実な願いをよく表しており、唱えやすさも考慮して、「日ごとの糧を今日も」とする。マタイ福音書を基調とすれば「必要な糧」となるが、ルカ福音書をも勘案し、「日ごとの糧」という表現にそのニュアンスは含まれていると考えてよいであろう。
4. 「お与えください」のほうが、「与えてください」よりは尊敬の気持ち強いニュアンスである。祈願の項目については、「お　く　ださい」という表現にする。
- 6 わたしたちの罪をおゆるしくください。わたしたちも人をゆるします。

ロ - わたしたちに負債のあるものをゆるしましたように、
わたしたちの罪をもおゆるしくください。

聖 - わたしたちに対して罪のある者をゆるしていますから、
わたしたちの罪もゆるしてください。

1. 聖公会祈祷書の「ゆるしていますから」は完了形で、マタイ福

音書の「赦しましたように」という過去形に近い表現だが、条件のように受け取られる表現である。神のゆるしが前提ということが共有されていれば問題ないが、実際唱えるには抵抗を感じる箇所である。神からの無条件のゆるしの恵み、受け取る人間の側の姿勢によってその恵みを実効あるものにすること、両方の意味が含まれるが、一つの文章で同時に表現することは難しい。

2. 接続語で一文に繋がずに、二文に分けると、「おゆるください」という神への呼びかけが先にくるので、神のゆるしの恵みが前提であることが明確になる。唱えるときの余韻もあるので、二文に分けても支障はない。

3. 「負債のあるもの」「罪のある者」については、罪をゆるすことは神のみがなさるわざであり、人が人に対してであれば「負い目」「負債」をゆるすことになるが、そのような人の全体を受け入れるというニュアンスで、「人をゆるす」とする。はっきり過去形で表現すると支障があるので、ここでは現在形のほうが柔らくなる。

- 7 わたしを誘惑におちいらせず、悪からお救いください。

ロ - わたしたちを試みにあわせず、悪からお救いください。

聖 - わたしたちを試みにおちいらせず、悪から救い出してください。

1. 「試み」とするか「誘惑」とするかでニュアンスが違うが、誘惑に打ち勝つ力を求める祈願である。ここでは、イエスがゲッセマネで弟子たちに言ったことば「誘惑に陥らないように、目を覚まして祈りなさい」を参照した。

2. 「悪」は、第一義的には「悪い者」「悪魔」であるが、それらを含めて「悪」とする。聖公会祈祷書の「救い出して」は積極的な表現だが、全体の敬語表現のバランスもあり、「救う」という表現で広い概念が含まれると考える。

- 8 国と力と栄光は、永遠にあなたのものです。

口 - 国と力と栄光は、限りなくあなたのもの。

聖 - み国も力も栄光も、世々に限りなく主のものだからです。

1. 聖公会では通常主の祈りの後に頌栄（しょうえいdoxology）を続けて唱えている。ローマ・カトリックではミサの式次第の中に、主の祈りの後の副文の応唱としてとり入れられているが、通常は主の祈りには含まれない。エキュメニカルな集会の際にはともに唱えることになるので、本文とあわせて案を作成した。
2. 「国」は、聖公会でも「み国」ではなく「国」に修正する予定である。「限りなく」よりは「永遠に」のほうがわかりやすい表現である。
3. 歌う場合には「です」を省くこともできる。

第55回聖公会／ローマ・カトリック合同委員会（1999年3月11日）記録より
共通訳「主の祈り」に関する日本聖公会（定例、2月）主教会の報告

1. 原案に対して好意的な意見が出された。
2. 原案通りに通したいという主教会の意向を添えて、諮問委員会である教理礼拝組織委員会に諮問し6月5日からの主教会に答申させ、2000年の日本聖公会定期総会に対して、祈祷書改正に必要な第一回の承認を得ると共にあわせて試用を求める議案を主教会が提出する。この議案が可決されて試用が可能となる。カトリック教会におけるように原案の段階で試用して意見の収集を行わない。また新しい訳文への親切な解説が必要であるとの意見も出された。
3. カトリック教会の取り扱いに関してはファックスで下記の連絡を頂いている。

「今週行われた司教総会において、ワーキング・グループで作成した「主の祈り」（案）の試用について検討が行われました。その結果、カトリック教会としては、この案文を5月まで各教

区で試用し、寄せられた意見をもとに次回1999年度定例司教総会（6月）においてカトリック教会としての意見をまとめ、改めて今後の取り扱いについての検討を行うことが、承認されました。意見収集の方法は各教区に一任されています。」（2月18日4時）

カトリック教会側から「主の祈り」共通訳（案）と市瀬英明神父執筆『主の祈り：口語訳によせて』が参考資料として配付された。

共同訳「主の祈り」の使用について

第53回以降、毎回の聖公会／ローマ・カトリック教会合同エキュメニズム委員会で協議されて来た合同礼拝の日が、2000年6月8日（木）に実施することが決定され、その時に向けて両教会では、それぞれの側ですでに合意に達した「主の祈り」の文言を印刷したカードを配付して、合同礼拝に備えることとなった。この礼拝は、そのシンボリックな意味からも東京で行われたのであるが、全国各教会においても使用するようになり、双方の教会で共同訳「主の祈り」が印刷配付され、今日使用されている。

〔注〕

1)「どのように祈ればよいのでしょうか」と弟子たちから質問を受けた時に、祈りの模範として、イエスが教えたものである。それ故、キリスト教の教会では非常に重んぜられ、教派を問わずキリスト教の礼拝や祈禱会、集会においても、また個人の生活においても、常に繰り返し唱えられて来たり信徒たちは声を揃えて祈るのである。また信徒の訓練と教育にも大いなる役割を演じて来たり、その講解も非常に多くのものが出版公刊されている。その内容がキリスト教の最も重要な事項に関連しているからである。「主の祈り」の本文は、マタイによる福音書6：9-13、ルカによる福音書11：2-4の二箇所に記載されており、その文言は全く同一であるとは言えないが、どちらが本来の形だったかを決定することはむずかしい。しかし、教会で使用されているのは、より長く儀式的莊重さをもつマタイによる福音書のものである。それが授けられた機会も、マタイによる福音書の方はイエスから進んでと、ルカによる福音書の記事では弟子の求めに応じ、と異なる情景設定となっている。マタイによる福音書によると、天にいますわれらの父よ という呼びかけにはじまり、続く6項目の祈願から成っている。国と力と栄光とは、あなたのものです という結語は、ある写本には記載されており、教会の祈禱文には付加されているが、権威ある写本には記載されていない。6項目の祈願は2部に分かれ、前半1.神のみ名 - 神ご自信 - があがめられるように、2.天国 - 神のご支配 - がくるように、3.みこころが、地上でもおこなわれるようにという三つの事柄が祈られている。これらは神ご自身のこと、神の国のことに関しており、それらが信徒にとって最も重要であること、イエスの福音の中心を形成しているからである。イエスの説く「神の国」は近づきつつあるのだから、その日を早く来させ、この地上を神のみ心が行われる聖なる地とならせてくださるように祈ったのである。(終末論的基調)

後半の部分は、以上と関連仕手地上のこと、人間の生活そのものが祈りの対象になっている。その1.わたしたちの毎日の食物について、その2.わたしたちの罪とそのゆるしについて、その3.はわたしたちの受ける試みと悪しきもの - サタン - からの救済につてである。これら3つの事柄も、信徒のこの世生活にお

いて根本的な意義を持っており信仰生活に極めて大切である。信徒はそのことを自覚し、毎日の祈りの対象としなければならない。それと神の国の到来とは密接な関係をもっているからである。

ルカによる福音書に記載されているもののほうは、みこころの項目と第6のものに結びついている 悪しき者からの救いの項目がない。しかし祈りの実行が大切であることを説いたイエスの言葉が前後に置かれていることは、両書とも同じである。食物のための祈りは、それを広く解釈すると、平和な地上の政治のためのものであり、罪のゆるしは神と人間の和解と平和の樹立のため、試みにあわせず は、罪を犯さず神の前に正しい生活をするようにとの祈りであって、社会生活の根本条項に関している。(山谷省吾、キリスト教大事典、昭和38年、教文館、532p.)

- 2) 1572,8,23-24、聖バルトロマイ祭日の夜半に多数のユグノー派が殺戮された事件。カトリヌ・ド・メディシスとギーズ公一派の陰謀により、コリニー提督ほかプロテスタント貴族および一般市民約5千～1万人がパリその他の都市で虐殺された。この報知にローマ教皇が歓喜したと伝えられている。
- 3) パーゼル大学の教会史教授で、第二次世界大戦前後のプロテスタント世界における、二と言われる学者であり、わが国のキリスト教会にも多大の影響を及ぼしたスイスの神学者。
- 4) 英国教会第99代カンタベリー大主教ジェフリー・フランシス・フィッシャー (Geoffrey Francis Fisher 在位 1945-1961)、在位晩年の59年春には、日本聖公会の宣教百年記念行事のために来日し、本学の開学礼拝に出席して祝福と祝辞を与えた。
- 5) 第2次世界大戦後、初のランベス会議であり、戦争中の教会の疲弊、アングリカン・コミュニオンの交わり復旧、戦災被害の著しい教会への救援等を議したが、日本聖公会からは八代斌助、柳原貞次郎、蒔田誠の三主教が出席した。
- 6) 南インドのキリスト教会では古から他教派の牧師や信徒たちが協力しあって来ておったし、19世紀後半から漸く進展しはじめた教会再一致の波をうけて、1902年以来南インドではプロテスタント教会が合同再一致が進められており、

1947年聖公会の決定によって、かつてのアングリカン教会、長老教会、メソジスト教会は消滅して、同年9月27日以後、一つの南インド教会が存在するようになった。拙論「南インドにおける、教会合同の経過とその問題」、立教大学神学年報、第2号、昭和32年2月所掲。

- 4．第52回聖公会／ローマ・カトリック教会合同エキュメニズム委員会で共通の「主の祈り」作成したいという提案がなされ、次ぎの第53回会議においてはすでに記したようなカトリック側の報告がなされたが、そのことを裏付けるものとしてで以下のような資料が配付され、カトリック教会では1972年以来検討が、典礼委員会を中心に司教会総会で重ね、積極的に進められて来たことを明らかにした。

典礼委員会資料『「主の祈り」に関する経緯』

1972年1月 日本キリスト教協議会・信仰職制委員会より「主の祈り」の統一訳が届く。これは、日本の全てのキリスト者が教会・教派の相違を超えてともにとなえることのできるエキュメニカルな検討から生まれたもので、積極的な使用の要請であった。

天の父よ

み名があがめられますように

み国が来ますように

み心が天でおこなわれますように

地上でも行われますように

わたしたちに、今日も、

この日のかてをお与えください。

わたしたちが罪を犯した者を ゆるしましたから

わたしたちの犯した罪を おゆるしください。

わたしたちを誘惑から導き出して 悪からもお救いください。

み国も力も栄光も

とこしえにあなたのものだからです。

アーメン

- 1978年 5 月 定例司教総会
上記の「主の祈り口語訳を提出。マタイ福音書を基礎とし、聖書のテキストの翻訳としてではなく、教会共同体で大人も子どもとともに用いる典礼の祈りとして提案した。
その結果、今総会で出された意見をもとに、教理委員会と典礼委員会審議し、次回司教総会に提出することとなった。
- 1978年11月 臨時司教総会
教理委員会から提出された「主の祈り」口語訳については、今総会での決定を控え、典礼委員会で検討したうえ、祈祷書作成に考慮することとなった。
- 1978年12月14日 典礼秘書局会議
- 臨時司教総会報告 -
教理委員会の専門家が作成した「主の祈り」口語訳が提出された。典礼委員会と共同作業をし、検討することとなった。
- 1979年 2 月16日 典礼秘書局会議
「主の祈り」口語訳については、教理委員会との合同会議を行い 6 月定例司教総会に提出することを決定する。
- 1979年 4 月26日 典礼秘書局会議
6 月定例司教総会に提出する「主の祈り」口語訳について検討した。

共通訳「主の祈り」に思う

1979年 5月24日 典礼秘書会議

6月定例司教総会に提出する「主の祈り」口語訳について教理委員会と話し合った。

1979年 6月12日 典礼司教委員会

「主の祈り」口語訳について最終的な検討を行った。「主の祈り」口語原案については、未完成の感があるので、慎重にすすめるとなる。

1979年 6月 定例司教総会 - 「主の祈り」口語訳について -

1978年5月の司教総会で、教理委員会と典礼委員会が合議の上で案を提出するよう求められた。それ以後、出された案をもとにして、国語典礼文起草委員会を教理司教委員会秘書が協議して、共同提案の祈りが提出された。

天の父よ

あなたの力を現して、

すべてを支配してください。

あなたの望みが天にも地にも行われますように。

日ごたのパンをきょうもお与えください。

わたしたちの罪をおゆるしてください、

わたしたちも人（の負いめ）をゆるします。

わたしたちを誘惑から守り、

悪から救ってください。

（決議）

新しい「主の祈り」について、教理委員会と典礼委員会とがさらに打ち合わせ、協議する。

1979年7月5日 典礼秘書局会議

「主の祈り」口語訳については秘書局レベルでの検討が終了し、今後典礼司教委員会で検討することとなる。

1988年10月17日 典礼委員会定例会議

- 「主の祈り」口語訳について -

新しい祈祷書に、口語の「主の祈り」を掲載するという意見があるが、『ミサ典礼書』の発行を準備していたころから、典礼委員会でも「主の祈り」の口語訳の検討をすでに行っていたので、過去の資料をもとに対応する必要があることが話し合われた。

1990年9月15日 『日々の祈り』発行 - 司牧司教委員会 -

同書に記載された口語訳は以下の通り。

天の父よ、み名が尊まれますように。
み国が来ますように。
み旨が天と同じく地でも行われますように。
わたしたちの日ごとの糧をきょうお与えください。
わたしたちが人をゆるすように、わたしたちの罪をおゆるしてください
わたしたちを誘惑に陥らせず、悪からお救いください。
ア - メン。

典礼委員会としては、この祈り文についての検討は行っていない。

1993年12月 臨時司教総会

『日々の祈り』に掲載されている「主の祈り」を典礼に使用する件『日々の祈り』に掲載されている「主の祈り」(口語)を典礼

共通訳「主の祈り」に思う

で使用するについて審議した結果、(1) 子どもとともにささげるミサにおいて(2) 状況によって、口語がより適合すると考えられる場合、に使用することが承認された。

1994年 1 月24日 典礼委員会定例会議

臨時司教総会報告として、『日々の祈り』の部分について報告があった。「主の祈り」(口語) を(1) 子どもとともにささげるミサにおいて(2) 状況によって、口語がより適合すると考えられる場合、に使用することが承認された。

典礼委員会「主の祈り」に関する見解をまとめて常任司教委員会に提案してほしいと望んでいる教区もあるので、近い将来、典礼委員会で審議があるだろう。この問題は13年前に審議した経緯もあるので、繰り返しを避け、発展的に対処していくことが必要であるとの意見が出された。

1994年 3 月14日 典礼委員会定例会議

典礼委員会としては、将来『ミサ典礼』改訂の作業の中で、典礼書に掲載する訳文のひとつとして、新しい「主の祈り」を検討することになるという見解をもつこととした。

1995年 9 月28日 『ミサ典礼書』研究部会

「主の祈り」については、『ミサ典礼書』3 研究部会とは別に、内容と口語化を検討グループを発足させることを典礼委員会に提案することを決定した。

1995年11月20日 典礼委員会定例会議

「主の祈り」の口語化に関する資料整理を市瀬英昭委員に依頼した。同研究グループも名古屋方面を中心に働きかけることとなった。

1997年4月8日 宣教司牧秘書会

エキュメニズム委員会より、聖公会・カトリック合同委員会において、「主の祈り」のエキュメニカルな共通な祈りについて話し合っていくことが報告された。

1997年5月12日 典礼委員会定例会議

1997年4月に行われた宣教司牧秘書会の報告を行った。

エキュメニズム委員会でかかわっている聖公会・カトリック合同委員会では、将来的に各教派の公式な典礼書・祈祷書に採用できることを目標に、聖公会とカトリック教会との間で共通の「主の祈り」を作成したいという要望が出されている。典礼委員会としても、新ミサ典礼書にはエキュメニカルな共通の「主の祈り」を掲載することが望ましいと考えるため、今後エキュメニズム委員会に資料提供などをし、現場で利用できる祈りの作成に協力することとなった。

1997年6月 定例司教総会

「主の祈り」の共通テキスト作成に関する件

エキュメニズム委員会が提案した「『主の祈り』のカトリック教会・聖公会共通テキスト作成」のための準備作業を開始することを、事前にプロテスタント諸教派にも参加を呼びかけることを条件に承認した。

なお、同テキストを典礼中に用いる公式な「主の祈り」とするかどうかについては、テキストが作成された時点で改めて司教総会に諮ることにまった。

1997年9月19日 『ミサ典礼書』3 研究部会

「主の祈り」について意見交換を行い、「主の祈り」の口語文作成

共通訳「主の祈り」に思う

の経緯について司教レベルに公開し、勉強会などを開催できるとよいという意見が出される。

1997年9月29日 典礼委員会定例会議

「主の祈り」についての研究会について

9月に行われた『ミサ典礼書』3研究部会において出された、「主の祈り」の勉強会について典礼委員会としての方向を確認した。

「主の祈り」の勉強会をある一地区で行うよりは、典礼担当者会議などで行うほうがよいという意見や「主の祈り」だけでなく「讃歌」を含めた研究会としたほうがよいなどの意見が出された。

1997年10月3日 聖公会・カトリック合同委員会

田代秘書が出席し、典礼委員会として取り組んだ「主の祈り」口語訳について経緯を説明した。

